

「周手術期患者のリハビリ意欲を高める関わり」

全体性のパラダイムに立って患者を理解したとき、みえてきたもの

氏名：本田彩

所属：東京医科大学八王子医療センター

【はじめに】

看護師は、日々のケアを通して、様々な状況のもとで苦悩している患者と出会う事がある。そのような時、私達は、患者が少しでも早くその状況から脱せられるよう、手助けをすることとなる。私自身の経験では、その手助けの多くは、患者の困難な状況を問題と捉え、解決策を見出すとう方法が選択されている印象である。マーガレット・ニューマンは、看護師と患者が共にする仕事は、新しい方向性とパターンが開示するまで、「そこに留まる」ことであるといっている。本事例は、看護師である私が、周手術期にある患者A氏の苦悩の中に留まり、全体性のパラダイムに立って患者を理解するケアの重要性についての体験を、まとめたものである。

【ケアの実践】

A氏は、膵臓がんで手術を受けた、60歳代の男性であった。A氏は、術後1週間が経過した頃、感染症を併発し、個室で入院生活を送っていた。この頃のA氏は、日中の殆どの時間をベッド上で過ごし、担当看護師達の関心は、“何故、A氏がリハビリに積極的に参加しないのか”という事であった。看護師達は、A氏にリハビリの重要性を繰り返し提案したが、A氏から返ってきたのは、無言やため息であり、柔らかい笑顔を見せていた術前とは、様子が明らかに違い、看護師達は戸惑った。また、看護師達の中で“A氏は関りづらい困った患者”という思いが膨らみ、互いに深く踏み込まないような関係性が作られていった。

そのような状況の中、私はその日のチームリーダーとしてウォーキングカンファレンスでA氏と会った。A氏とは、手術前に一度会っていただけであったが、目の前にいるA氏は、別人の雰囲気を見せていた。私は、私を含めた看護師達とA氏の間には、透明なカーテンがヒラヒラと舞っているように見え、お互いが同じ空間にいるという事実以外は、何も共有していない存在のように感じた。また、担当看護師は言葉にはしないものの、A氏の機嫌を損なわないよう、恐る恐る声をかけていた。

生気を吸い取られたようなA氏は、ベッドに横になったまま、わずかに唇を動かして返事をしていた。その様子には私は、“Aさんに一体何が起こったんだ。Aさんに必要なのはリハビリの説明なんかじゃない。Aさんに寄り添う存在が、今、必要だ。”と強く感じ、A氏に何が起きているのか理解しようと、全体性のパラダイムに立ち、2回の対話、そして数回のケア場面を通して、A氏と関った。

初回の対話の時、A氏はやはり生気を吸い取られたように静かで、言葉を交わすことは殆どなかった。眉間に皺をよせ、体の表面からはひりひりとした緊迫感を滲ませていた。

2回目の対話、A氏は行き場のない辛さを吐露した。A氏は、ぼんやり正面の壁を見ながら「何をすればよくなるのか分からなくて、考えるのが辛い」と話した。絞り出すよ

うな口調は、徐々に落ち着き、最近まで裁判官をしていたこと、仕事ばかりで妻と過ごす時間があまりなかったこと、退職したら、妻と過ごす時間を一番大切にしたいと思っていることを静かに話し始めた。A 氏の全身を覆っていた緊迫感は、徐々に緩み、「奥さんと一緒に過ごすために、A さんにできる事を探しているのですね」と、私が投げかけると、A 氏は、私の腕を、ギュッと握り、静かに涙を流しながら「そうです」と返した。その後、私と A 氏は、A 氏が妻と過ごすためにできる事を考え、“まずはリハビリでしょう”という意見で一致した。A 氏は、提案した運動に「なるほど、なるほど」と相槌しながら選択し、自ら出来ることを探していった。

担当看護師は、A 氏とのやりとりの内容を聞き、A 氏の行動の意味が分かり、ホッとした様子を見せ、今後は A 氏と共に、日々、一緒にできる事を考えることとなった。

【まとめ】

私達看護師は、ケアを実施するにあたって、患者の理解を促し協力を得るために、客観的な数値や事実を用いて、看護師が患者にとって必要だと考えられる医療について説明することがある。これらは、患者が自ら意思決定をし、最良な療養環境を整えるために、大切なものである。今回の事例の担当看護師達も、臥床による廃用性症候群のリスク増加という医療的な側面と、退院後の体力の保持をサポートするという看護的な側面の両方から、A 氏にとってリハビリが重要だと考えていた。そして、担当看護師達は、リハビリに積極的に参加しようとしないう A 氏の行動を問題ととらえ、それを解決するために、A 氏に対してリハビリによる効果の説明を繰り返したのだと考えられる。しかし、全体性のパラダイムに立って、A 氏を理解しようと関わり、みえてきたのは、A 氏にとって大切であったのは、妻と共に過ごすこれからの時間であり、必要であったのは、妻のために自分が出来ることを、見出すことだったのではないかと振り返る。この気づきは、部分的な問題の解決にとらわれずに、全体性のパラダイムに立って患者を理解しようと関わったからこそ、得られた気づきであったと思う。

今回の事例を通し、看護師のケアの実践で大切なことは、患者にとって重要なことを、看護師側の視点で決めるのではなく、患者の視点からみえる世界に関心を寄せ、共に「そこに留まり」ながら、目の前の患者にとっての大切な事、すなわち、患者にとっての“善”とはどのようなものかを、理解する姿勢だと考える。